



マリーナ・アブラモヴィッチさんが 熊本訪問

8月29日、世界的に有名な現代美術家、マリーナ・アブラモヴィッチさんが、熊本市現代美術館(仮称)の心臓部ともいえるホームギャラリーの本棚をデザインする、その打ち合わせに来熊しました。活気に満ちた熊本の街を大変に気に入り、繁華街の中心にできる現代美術館に大きな期待を寄せていました。



《ピエタ》<Pietà> 1963
当時のパートナー、ウライとのコラボレーションによるパフォーマンス。ピエタとは、死せるキリストを抱きかかえ、嘆くマリアのイメージ。



《リレーション・イン・タイム》<Relation in Time> 1977
ウライと髪を結びあい、17時間動かさずに尻り続けるというパフォーマンス。



プランを練るアブラモヴィッチさん
(豆腐とピップエレキパンがお気に入りの様子でした。)

●略歴/1946年、旧ユーゴスラヴィアのベオグラード生まれ。とくに身体をクローズアップしたパフォーマンスで知られる。1997年のベネチア・ビエンナーレで金獅子賞(グランプリ)を受賞。

- 「第一回回展」(八・七・八・二二)
- 「熊本大学教育学部美術科三年グループ展」(八・七・八・二二)
- 「熊本市千歳通町2-1-9」(三三・三三・三三)

- 「第七回大東文化大学書展」(七・三・一八・五)
- 「第一回回展」(八・七・八・二二)
- 「第一回回展」(八・七・八・二二)
- 「第一回回展」(八・七・八・二二)

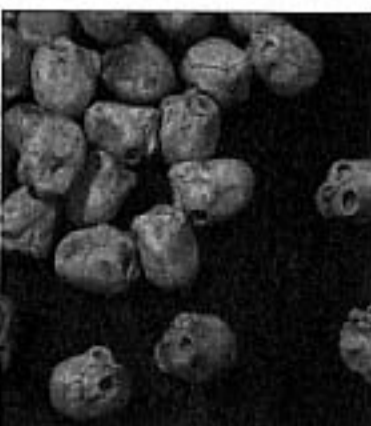
2001.11.18-19のギャラリー展

ART DE GYAN

アート・ギャン

熊本市千歳通町2-1-9 電話3351-8411

熊本市立美術館分館ギャラリー



熊本市立美術館の作品「死んだらガイコツ」部分

品制作に取り組み姿勢を感じさせる。松田実美さんの「ねぎ」(四五・五三・七九センチメートル)はねぎの根元をくらくらみかき回して見える作品だ。ねぎの根っこを表現するのに向度も執拗に引いた線の色が組みあわせが美しい。(H・T)

●「第一回回展」(八・七・八・二二)

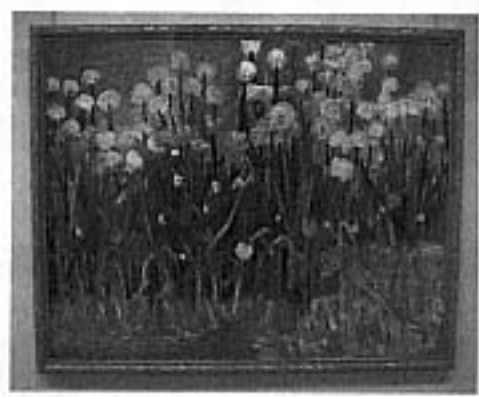
上村方雄さんが会長を務める同社の社員五人が、かな、調和を中心に、服や靴、靴など約100点を展示。方雄さんは「故実書 服色図解」という明治中期の版本による資料に目を留めている。小島ながら珍品で上品にまとめている。更に木田美子さんの「紅い糸」に書いた津波被災者も、箱によくマッチして美しい。

●「第四回日中友好連交書展」(八・一四・八・一九)

書を通して中国と交流してきた国際文化交流協会会員二人と、中国・佛山市の書家二人が、篆書、かな、調和と書道など三六点を展示。中国の作品はオーソドックスで重厚な用筆である。日展理事の尾崎忠雄さんの「格調の高さを感した。森山秀吉さんの「高田印」写真展。ふるさとの風景(八・一四・八・一九)半成1000年の間に描かれたためた写真を発表。農村に生きる猫や山羊に始まり、池川、道相神と続き、農家に携わって生きてきた力強い人々と高田さんの視点も移る。高田さんのカメラと写された人々の笑顔の間に、お互いへの尊敬の思いが感じ出されている。

●「G.A.A.2001」一五人の作家による平和回展(八・一四・八・一九)若手の作家たちによる彫刻・インスタレーション・パフォーマンス等による展示。「平和」を大枠のテーマとし、それぞれ自分にむきつけて表現する。許斐田史さんの「死んだらガイコツ」は、遠目からだと山積みのお菓子の見える。だが近寄ると、乾いた血のような色の頭蓋骨の頭蓋骨だということに気づく。一つ一つ微妙に異なる美焼きのガイコツ。圧倒的な数は知らずかれ、さらに紙張の上で並べられる様子は、ジェノサイドの副作用、ひとが個人として存在することの意味「を尊重することへの両陣を、思い起こさせる。(H・T)

●「第九回研習会書展(二八・二二〜二八・二六)」：日展会友の田内研水さんの弟子四七人が五三点を展示。万葉集や古今和歌集、白歌集などをかなや園和体で書き、朝や晩葉、屏風でみせている。田内さんは、兼好法師のつたを、羊毛の大字かなで流麗、温厚にまとめ、ちうしうのうまほも目にしつく。万田指原さんは藤原盛房の歌を丁寧な筆遣で遊味に仕上げている。(S.K.)



浅野義孝さんの作品「ネギギーズ」

●「ASIAN展(二八・二二〜二八・二六)」：九州、香港、韓国、中国のグラフィックデザイナーのポスター展。香港のスタンリー・ウォンさんは、身体部分写真を漢字に充てこむテーマの作品を出品していたが、このタイプの作品にありがちな同封装つた図が無く、おちやちやけたエロスをかもし出していたのは「ニヤリ」。

●「第一回回展 彫刻GROUPO(二八・二二〜二八・二六)」：四名にわたるブロンズ等の彫刻展。作品は、静謐な美で、地に足のついたバランスの取れた表現。飽くなき自己鍛錬の途上、道を模索している様子がかがわれる。

●「第三回熊本県シルバークラフト展(二八・二二〜二八・二六)」：写真・書・日本画・洋画・彫刻・工芸の展示。全作品に芸術を凝しむ気持ちがあらわれていて、楽しい。八三歳の田中敬子さんの「風」に誘われてという作品には、作者が四季を愛し楽しむ心が存分に表現されていた。また、奥平洋子さんの「阿蘇草花」は、版画作品で、夕焼けの赤に染まる阿蘇とグレイのグラーションで表現された家屋との色使いの組み合わせが美しい。(H.T.)

いるグループ展で、今回は約六〇人が版画、行草書の作品を発表している。制作は各人の自由に行っており、表現様式も変化が見られるが、中央展に出品している会員の大作はさすがに充実しているレベルも高い。(T.M.)

●「第三七回近代詩文書作展(二八・二二〜二八・二六)」：十二人が漢字とかなの混書、近代詩文書など三十四点を出展。井上孝子同会の会長は、王羲之の草書と岡本松溪の句を力強い用筆で明瞭闊達にまとめている。大宮三子さんは芥川龍之介の詩の假名遣をローマ字を変えて美しく表現している。(S.K.)

●「第一五回花の空 熊本県立美術館(二八・二二〜二八・二六)」：二〇名の出品者による花の写真展。虫の止まったコスモスやハス、ヒマワリは自然の豊饒さを際立たせる。浜田順さんの「ハス」は静寂にハスの葉、菊葉にハスの花、その花に止まるとんぼ。そのチヤンスを捉えた瞬間の心の高揚りをも感じさせる。

●「第二四回ぐるーびの丸展(二八・二二〜二八・二六)」：熊本県立第二高校美術部OBによる展覧会。三名が出展。二回生の朝馬利恵さんの「おぼくへは」は、油彩画で、おぼくという見慣れた風景を、パステル調の色使いながらも個性的な色の平面的なマツ、組みあわせ・配置によって眼を惹きつける。その他、タフロー、陶器、グラフィックデザイン、写真、書など多様な作品を展示した。(H.T.)

●「第二九回県立会書作展(二八・二二〜二八・二七)」：熊大書道部卒業生を中心とした会の、年に一度の作品展。各人がそれぞれの熱意を自由に行っている。書風、書体に変化が多く、多様な様式が楽しめる。一面、全体レベルを高める努力が常に問われるところである。(T.M.)

●「野口松油絵展(二七・三二〜二八・六)」：二〇年北九州生まれ、昭和五二年九州造形大学彫刻卒。青や赤など手吹きガラスならではの深い色合いと、あらかな輪郭線が眼に映やがた。

●「コラハムクワックの世界(二八・一四〜二八・二〇)」：長岡卓油彩展(二八・二二〜二八・二六)。草やかなコスモスのピンク色のあふれた展示。その中で「初雪(阿蘇)」が目玉を引いた。積み重ねがかる雪と阿蘇の冬景色。熊本四季の風情も感じられた。(H.T.)

●「現代展三 絵の世界」：ジャズびびく絵画展(二八・一八〜二〇)。四名の大きな作品が出品。ジャズセッションを行うジャズメンを様々な角度から描く。カンティンスキーが名づけたように、色に富みついてまわるようだ。また、渡部(アール・O)の小鳥の作品は五五展示。(H.T.)

●「洞夏来遊(一)展(二八・二四〜二八・三二)」：大橋志奈子さん、出口文教さん、中村朋子さんによる三人展。出口さんの作品は素直さで、有機的な形がユニークで愛らしさを感じさせる。日常の器と意図されている。そこには自分な遊び心が込められている。大橋さんと中村さんによる小物やトシャツには着物が使用されていて、花柄や格子柄にあわせて、画で使ったり、対照的な配置にしたりと工夫して柄を活かしている。(H.T.)

●「第一回 菜明美のGROUPO(二八・二二〜二八・二六)」：九名のアマチュア画家による展覧会。主に水彩による静物画が展示された。身の回りのものを描き、見る者をほっとさせる空間を作り出していた。

●「グループシエイ作品展(二八・二二〜二八・二六)」：グループシエイ作品展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。時間をたまたま楽しいおしゃべりに費やすのではもったいないと、シエイの常連客を中心に店主の永田順子さんを中心に結成されたグループ。毎週水曜日に集まり、それぞれの自主的な活動がすべて。昨年、奥のアマチュア絵画展でグランプリを受賞したという、慣れない筆致が、えって新鮮に印象を植え、素晴らしい作品に結実していた。

●「いずみ南アートクラブ作品展(二八・二二〜二八・二六)」：いずみ南アートクラブ作品展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。メンバーは、注目の田代三さんが以前勤務していた中学校のPTA。毎年一回展覧会を開催してすでに二五六年が経つ。田代さんは、「もう一歩踏み出して、世間に広く発表していつてもいいくらい。メンバーは皆、実力がある」と活動を評価する。水彩、油彩の二二点が展示された。(K.K.)

●「天上の音楽 世界のオルゴール展(二八・二八〜二八・三〇)」：凝った装飾の木箱は、まさに宝物の箱のようだった。物としての魅力に加え、オルゴールの美しい音が箱の中に入められる。会場には小さなものから展示されたが、大きなもので一四四升の大箱が、目玉となった。これはピアノでいえば連弾に相当する音の幅を持つもの。購入したとすれば、どこに置くかは問題であるが、家庭になることは間違いない。

●「熊本県小島美術館(二八・二五〜二八・二九)」：熊本県小島美術館(二八・二五〜二八・二九)で開催された。土を調製するのではなく、手摺りで調製することによって、素材の味を生かした作陶をしている。器には、自然の土が折かれて鋭角する赤やグリーンが美しく浮き出ている。目を奪われた。

●「鶴美展(二八・二九〜二九・四)」：鶴美展(二八・二九〜二九・四)は、鶴美画廊おすずめの作家陣が一室に集った展覧会。伊志良流さんの「鶴美紅装絵巻」は、さりげなく、さりげなくとされたとはかした色遣いにリアリティがあり佳器だった。また、鈴木三成さんの「青磁展」は、ヒビ目が非常に美しく、モダンな雰囲気がかもし出している。目をひいた。(K.K.)

●「第一回 菜明美のGROUPO(二八・二二〜二八・二六)」：九名のアマチュア画家による展覧会。主に水彩による静物画が展示された。身の回りのものを描き、見る者をほっとさせる空間を作り出していた。

●「グループシエイ作品展(二八・二二〜二八・二六)」：グループシエイ作品展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。時間をたまたま楽しいおしゃべりに費やすのではもったいないと、シエイの常連客を中心に店主の永田順子さんを中心に結成されたグループ。毎週水曜日に集まり、それぞれの自主的な活動がすべて。昨年、奥のアマチュア絵画展でグランプリを受賞したという、慣れない筆致が、えって新鮮に印象を植え、素晴らしい作品に結実していた。

●「いずみ南アートクラブ作品展(二八・二二〜二八・二六)」：いずみ南アートクラブ作品展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。メンバーは、注目の田代三さんが以前勤務していた中学校のPTA。毎年一回展覧会を開催してすでに二五六年が経つ。田代さんは、「もう一歩踏み出して、世間に広く発表していつてもいいくらい。メンバーは皆、実力がある」と活動を評価する。水彩、油彩の二二点が展示された。(K.K.)

●「日々の暮らし(二八・二二〜二八・二六)」：日々の暮らし(二八・二二〜二八・二六)は、日之瀬薫、高原美之さんの作品展。

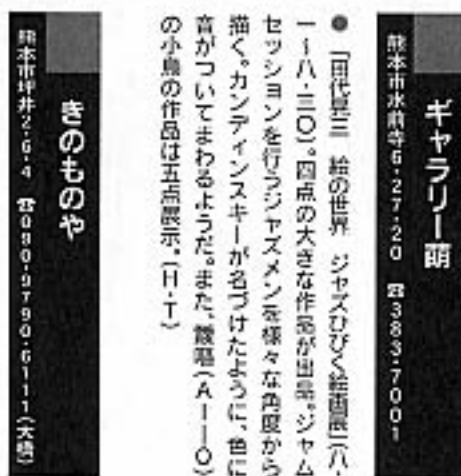
●「第三二回同光会書展(二八・二二〜二八・二六)」：同光会書展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。同光会書展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。

●「安井建二回展(二八・二二〜二八・二六)」：安井建二回展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。安井建二回展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。

●「田中治展(二八・二二〜二八・二六)」：田中治展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。田中治展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。

●「託展 絵画同好会展(二八・二二〜二八・二六)」：託展 絵画同好会展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。託展 絵画同好会展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。

●「高木穂英作品展(二八・二二〜二八・二六)」：高木穂英作品展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。高木穂英作品展(二八・二二〜二八・二六)が開催された。



出口文教さんの作品「花図」



出口文教さんの作品「花図」



出口文教さんの作品「花図」

●「アートルームイケオ」：アートルームイケオ(二八・二二〜二八・二六)が開催された。アートルームイケオ(二八・二二〜二八・二六)が開催された。

●「キャブリー・キム」：キャブリー・キム(二八・二二〜二八・二六)が開催された。キャブリー・キム(二八・二二〜二八・二六)が開催された。

●「熊本県伝統工芸館」：熊本県伝統工芸館(二八・二二〜二八・二六)が開催された。熊本県伝統工芸館(二八・二二〜二八・二六)が開催された。

福島 次郎さん

この連載では、熊本にお住まいで、様々な芸術ジャンルで活躍されている方々に、制作活動による熱い思いを語っていただきます。第3回目は、小説家の福島次郎さんにお話を聞きました。

経歴/1930年熊本県生まれ、東洋大学国文学部卒。帰郷後、県内の高校で教鞭を取る。「詩と真実」同人。著作に「現車」(1961)、「剣と寒紅」(1998)、「舞のかたみ」(1999)など

——「詩と真実」は全国的に知られている同人誌のひとつですが、熊本の文学状況はどうなんでしょう。

福島:1ヶ月1回出しているのは全国でも珍しいかな。ただ僕は自分だけのことを考えるタイプなので、審査を頼まれても、好きか嫌いだけでね。だから全体の状況はよくわかりません。僕の場合も、たまたまサーチライトが後ろから当たったにすぎないんですよ。マイペースで書き続けるだけなんです、僕は。

——そもそも、どういうきっかけで文学を志したんですか。

福島:子供の頃の3つの夢があって、「小説家」、「園芸家」、「挿絵画家」。他は考えたことはなかった。近所の女の子が貸してくれてね、吉屋信子の「花物語」の少女物語を泣きの涙で読むんですよ。小学校のときから冒険小説より、「維新物語」とか、今でいう不倫の映画ばかり見ていました。近所の子供にその見てきた映画を紙芝居にして見せるの。小説も菊池寛とか好きだったし、女の人が読む「キング」とかばかり読んでました。やっぱり吉屋信子が好きだったから小説家を志したのかなあ。挿絵も好きだった。

小説は教員になって落ち着いてから書き始めました。「現車」(1961)は自分勝手に書いた。「海に向かって大声で一人で歌う子供みたい」って言われるくらい好き勝手にやっていた。幸運にも「現車」で熊本県文学賞を31歳で頂きましたが、「バスタオル」でようやくお皿にきちっと盛り付けて、「さあどうぞ」と作品を出せるようになったという感じかな(笑)。僕は自分が自分を認めなくちゃ先に行けないから、そのために書いているのかもしれない。そして全部持っているものを出して死にたいんですよ。でも誤解も多くてね。

——私たち読者は書かれたものが事実かどうかではなく、つねに文学としてのリアリティーだけを根拠に、その書物に関わるのですから、心配いらないですよ。

福島:えっ、そんなこといってもらったのは初めてですよ。うれしいなあ、いつも「またあんなこと書いて」ですからね。いやあ、勇気ですよ。

——文学を志す、志さないにかかわらず、私たちが一度はその人生において向き合わなければならない作家のひとりが「三島由紀夫」だと思うのですが、福島さんにとって三島さんはどういう存在だったのでしょうか？



福島:「剣と寒紅」を書いているときは、そう思う余裕がなかったのですが、今思えば三島さんは普通の人でない「切なさ」、「いじらしさ」のようなものを感じさせる人でした。書いているときは本当は三島さんが怖くて、生首が飛んでくるかと思ったほどでしたよ。だから裁判に負けて、内心ほっとしているんです。三島さんの死は自分が自分を判断するということのひとつの象徴的な出来事だと思うんですよ。「こんなはずじゃなかった、もっといいものが書けたのに」って。死のうと思ったときから、死の形式があの人好みに準備されていったと思うんですね。でもこれは僕が空想するわけだから、みんな解釈が違う。自分に都合の悪いことは書かないし、自分が生きる道を見つけるために書くわけですね。三島さんもいろんな人がいろんな解釈ができるように死んでいった、やっぱり演劇的な人だったと思います。

——絵もお描きになりますね。やはり「挿絵画家」の夢の続きなんでしょうか。

福島:一度年賀状でピエロを描いたんですよ、それが誉められたから今ピエロばかり描いています。油絵も楽しい。風景画とか花の絵も描きます。庭いじりも好きなんです。疲れない。考えてみたら、ささやかながら子供の頃の3つの夢を叶えているんです。あと、映画が好きでね、京マチ子、山本富士子なんかのドラマチックなやつ。裕次郎なんか全然見ないの。身近にいるおもしろい人、奇妙な事、そういうものの中に真実を見るんですね。僕は人生においても間違えたことを面白いがるほうなんです。作品も、人に愛される風を受け止められても「ああそう取るのか」って面白がってしまう。そういう気持ちがあるからそれが小説になっていくのかもしれない。

——ありがとうございます。

(9月13日 於:福島次郎さん自宅 聞き手:南島 宏)

編集後記

ニューヨークの「同時多発テロ」は21世紀のありようを予言する恐ろしい出来事でした。しかし、忘れてならないことは、どんなにショッキングな光景であっても、それはテレビに映し出された画像であり、実際の想も生々しい血の匂いも届かない、無菌の箱の中のイベントであるという事実です。そして、私たちはその現場にいるかのような奇妙な錯覚、根拠のない正義感を振りかざそうとしたのではなかったでしょうか。事態はまだまだ続いているようですが、こうした擬似的な世界との関わり方に、ますます私たちの感性は支配されていくにちがいません。そうであるからこそ、私たちは美術という直接的な体験の場の意味を深く考えなければならないということなのです。

(学芸部長 南島 宏)

寄稿者紹介

兼城 昌山 (S.K.)

Shozan Kaneshiro

書道史にある江田船山古墳太刀銘を見た。約1500年前の「ヤマト言葉」を含む75文字の銀葉歌である。すごい、驚きだ。

森山 秀吉(淡草) (T.M)

Tanso Moriyama

再び感性、線度の極致に触れる傑作。平安中期匿名の頂点「深窓秘抄」と現代匿名の頂点「五鳳」。それに「曜変天目」と御所大黒刷毛茶碗。

田代 晃三 (K.T)

Kozo Tashiro

若いモデルに勘まされしていると自分勝手に感じて、つい夢中になって描いている私です。

学芸員紹介

本田 代志子 (N.D)

久しぶりに朝の挨拶を食べました。朝のあいしさに満足。季節限定の菓物はやっぱりいい。

坂本 顕子 (S.S)

コンテンポラリーダンスの発表会をみに福岡へ。皆さんとってもパワフル。感動したっ！

金澤 朋 (K.K)

憧れの人、マリナ・アブラモヴィッチと会ってしまいました。運命に感謝しました。

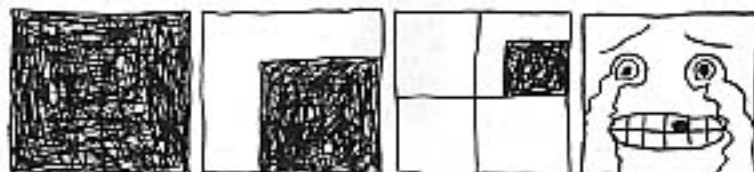
富澤 治子 (F.T)

朝晩が日に日に涼しくなってきた。そろそろ衣替えをしなくては。

蔵座 江美 (S.S)

左と絵本と奈良が好きで図書館担当の蔵座です。秋になるとミズヒキで遊んだことを思い出します。

黒い物味



イラストレーション/熊本デザイン専門学校 グラフィックデザイン科2年 崎方 優子